



に他の自動車メーカーのレース用GTマシンパーツの試作へと同社のフィールドは大きく広がっていった。

リーマン・シヨックを逆手に取って技術力を高め、海外市場でも存在感を示す

同社は2006年社名を現在の株式会社UCHIDAに変更し、CFRPに経営資源を集中する姿勢を明らかにした。そして同年、内田社長が経営トップに就任する。

内田社長は就任直後、リーマン・シヨックという災厄に見舞われたものの、その低迷期を新たな技術の開発に活用して、それまで手がけていなかった機能性部品の開発に成功。さらに、技術力のサンプルとして製作したCFRP製の盆載が海外の展示会で評判となり、それがきっかけでドイツの大手自動車メーカーの開発パートナーとしての監査に合格するなど成果を上げた。

こうして、国内外のトップ企業に評価される同社の技術力は、独自の生産管理制度や社員教育の賜物でもある。



テトラ社の空飛ぶクルマMark-5(マークファイブ)

「失敗は叱るべきところではないので、隠さずクラウド上の電子日報に載せて欲しいと伝えていまま。それを共有して、再発防止に繋げました」と

また、チームビルディングを目的にした研修を定期的に行い、社員同士が立場を超えてお互いを尊重し、支え合う風土づくりを進めており、徐々に成果も上がっているという。

自社ブランドを強化、人がと役立つ先端製品を開発

2018年、創業50周年を迎えた同社

では、近年、受注プロジェクトだけでなく、自社ブランドを含めた、より主体性をもった製品開発にも力を入れている。

同社が、国立障害者リハビリテーションセンター研究所と共同で開発してきた、脊髄損傷者用の歩行装置「C-FREX」は、2016年、パリで開かれた複合材料の世界最大の見本市でインベションアワードを受賞した。この装置は、オリンピック聖火の点火セレモニーにも登場したので、存在感の方もいるだろう。

また同社が機体製作に大きく関わっているテトラ・アビエーション(株)の空飛ぶクルマ「Mark-5」は今年アメリカで予約販売を開始し、これも同社が開発に参画している。ダイモンの月面探査車「YAO KI-1」は来年初めの打ち上げを目指して、急ピッチで製作が進む。

「私たちはモノづくりが好きな



ダイモン社の月面探査車YAOKI

で、これからもっとがった製品を手がけていきたい。また今、新しいモビリティやSDGsを意識した素材とか、さまざまな展開の可能性が立ちあふれているという意味で、ワクワクしていますね」

軽量で高い強度を持つCFRPの用途は、これから

- 会社概要**
- 社長 内田敏一氏
 - 設立 1968年(昭和43)10月
 - 資本金 50百万円
 - 従業員数 45名
 - 事業内容 CFRPや特殊素材を用いた製品・部品の開発・設計・製作
 - 所在地 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富2048-1 TEL 049-274-3030 FAX 049-274-3031 URL https://uchida-k.co.jp
 - 取引店 埼玉りそな銀行/川越支店

株式会社UCHIDA

UCHIDAは、炭素繊維強化プラスチック(CFRP)の成形加工に特化し、設計から加工、塗装、試験までをワンストップでサポートする。レース用の二輪車、四輪車を中心に、航空宇宙、医療福祉、果てはアートまで用途はジャンルを選ばない。

炭素繊維で樹脂を強化したCFRPは、鉄の10倍の強度を持つのに、重さは鉄の4分の1しかないという優れた複合材料だ。レース用二輪車の部品からこの分野に参入した同社は現在、国内メーカーのワークスチーム向け二輪、四輪レース車用ボディパーツを中心に、航空機エンジンのブレード等の試作、さらには月面探査車のボディまで、さまざまな最先端分野の仕事を手がけるまでに成長した。

「CFRPの設計解析から金型の製作、積層による成形加工。そのあとの検査、塗装、試験までワンストップでできるというのが私たちの強みです」(内田敏一社長)

国内・海外の大手自動車メーカーなどから寄せられる信頼は、同社の技術が世界の最先端にあると

いう証だ。

FRP製マネキンで創業、CFRPに進出しF1マシンパーツを手がける

同社は1968年(昭和43)、埼玉県入間郡で内田工業として創業した。現社長の父・内田俊雄会長が、FRPによるマネキンの製作を目的として立ち上げた同社はその後、ボウリング場のピン型看板、遊園地に設置する遊具などの造形物にその業務を広げていく。同社がCFRPに進出したのは1980年、きっかけはひよんなことだった。内田会長が行きつけの店で飲んでいたら、大手自動車メーカーに勤める飲み仲間から、レース用二輪車のカウルをCFRPでつくれないか、という依頼を受けたのだ。内田会長はこの依頼に

みごとと思え、翌年同社はこのメーカーとレース部品の試作契約を締結した。

内田社長は、1992年(平成4)に入社すると四輪車用エアロパーツ市場を開拓。一方、最先端のため、さらに高度な製品に進出するために、新たな設備が必要なることを痛感する。だが、高圧で加熱成形するための中型オートクレーブは、当時の年商の3分の1を超えるほど高価だった。

「まだCFRPは売り上げの2割ほどでしたから、父は、必要性は理解しているけど大反対でした。仕方がないので、父の信頼する工場長を口説き落としして(笑)」

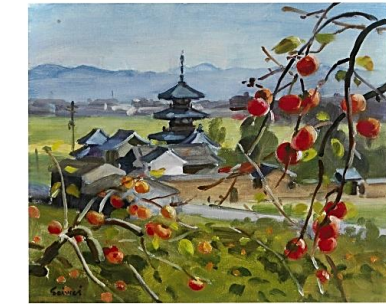
1999年オートクレーブを導入すると、二輪関連の部品の受注に成功。さらに2002年には、ついにF1マシンのパーツ試作、さら



代表取締役社長 内田敏一氏

炭素繊維強化プラスチックを自在に成形し、二輪から宇宙まで多彩な分野の進化を担う

特集 中小企業×スポーツ=未来ビジネス 東京2020五輪後、新たな始まりを迎えるスポーツビジネス スポーツテックが共創する新市場



TOPの決断 岡本泰彦氏 「次のステージを考えて、2年くらい前から、ベトナムやインドネシアなどの外国人材の介護士を採用し、将来の幹部候補として実務研修をしてもらっているところです」

りそな総合研究所

りそな一れ 11月号 2021年11月1日発行 (毎月1回1日発行 第19巻 第11号 通巻416号) 発行:りそな総合研究所株式会社

掲載されました